

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2014年 秋号

第5巻 第2号 (年3回発行)

(特集) 日本ケベック学会

2014年度全国大会開催報告

2014年11月3日発行

AJEQ2014年度全国大会を終えて

日本ケベック学会の第6回全国大会が10月12日(日)に立教大学で開催されました。大型台風の接近が心配されましたが、なんとか無事に全プログラムを終えることができ、胸をなでおろしています。

今回の大会の主要テーマは「フランコフォニー」と「多様性」でした。詳細は各セッションの司会者からの報告をお読みいただくとして、ここではごく簡単にご紹介しますと、まず午前中の自由論題セッションでは、AJEQ アンテルキュルチュラリスム の定番となった 問文化主義 に関する発表のほか、ケベックの映画や音楽放送に関する珍しい発表もありました。午後の基調講演ではケベックと北米の他のフランコフォン共同体との関係が歴史的に考察され、それに続くシンポジウムでは、フランコフォン世界における、ケベックの位置について、報道、ビジネス、インターネットを利用したフランス語教育など多様な視点から論じられました。AJEQはもともと学際的な学会としてスタートしましたが、設立から6年を経た現在、日本におけるケベック研究が確実に深化し、豊かな広がりをもち始めていることを実感させてくれる大会になったように思います。

参加者数はちょうど50名。参加して下さったすべての方々、とりわけ韓国ケベック学会のPark Heui-Taeさん(高麗大学)、トロントからお出で下さったMarcel Martelさん(ヨーク大学)、ケベック州政府在日事務所の天野僖巳文化・教育担当官とMarc Béliveau 広報担当官、そして、準備段階から献身的に

お手伝いくださった関係者のみなさんに、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

昨年、AJEQは辛い経験をしました。小畑精和前会長の急逝で、一時は心にぽっかり穴があいたような気がしたのは私だけではないはずです。しかし、その後の学会活動を見るかぎり、研究は停滞するどころかむしろ、いまだ消えぬ小畑先生のケベックにたいする熱い思いに突き動かされるかのように、ますます勢いづいています。ご遺族からの寄付をもとに、間もなく、充実した内容の追悼論集が発行されます。また、州政府からのご支援に基づいて、ビデオ・インタビューの新シリーズも、若手会員の協力により完成間近です。こちらは収録完了後、電子書籍になる予定です。

今年は役員改選の年で、10月から新役員会が気持ちも新たにスタートしました。これまで会員の特典としてパスワードつきでお送りしてきたこのニュースレターも、今号より一般公開することになりました。より多くの人たちにケベックを知ってもらうため、さらに魅力的な媒体になることを願っています。

(小倉和子、AJEQ会長・大会開催校代表)



AJEQ2014年度全国大会参加者による集合写真

● 本号の内容 ●

小倉会長による巻頭言・・・1 / (特集) 2014年度日本ケベック学会全国大会
開催報告・・・2 / AJEQ会員による新刊紹介・・・8 / 小畑精和先生一周忌
追悼出版物紹介・・・10 / 編集後記・・・10

(特集) 日本ケベック学会2014年度全国大会 開催報告

去る10月12日(日)に立教大学において、日本ケベック学会2014年度全国大会が、以下のようなプログラムの通り開催されました。あいにく、ケベック州政府事務所のドゥロンジエ代表は、体調不良により欠席なさいましたが(その後、無事、回復されたそうです。)、心配された台風の大きな被害も無く、比較的穏やかな日和に恵まれました。

大会での興味深い発表の内容や、活発に行われた発表者とフロアとの質疑応答などにつきましては、①自由論題セッション、②基調講演、③シンポジウム、のそれぞれの司会者による報告が、本号 p.3 以下に掲載されています。どうぞご覧ください。

また、それぞれの発表要旨については、下記の日本ケベック学会のHPよりご覧になれます。あわせてご覧ください。

http://www.ajeqsite.org/doc_taikai/2014taikai_resume.pdf

日本ケベック学会2014年 全国大会 プログラム

9:30 受付開始

10:00 開会式

- (1) 小倉会長による開会の辞
- (2) ケベック州政府在日事務所
クレール・ドゥロンジエ代表挨拶
(天野文化・教育担当官による代読)



開会宣言をする
小倉会長

10:15-11:45 ①自由論題セッション

●司会：山出裕子(明治大学)

(1) 「1950-1960年代のラジオ・カナダによる芸術音楽放送-ヨーロッパ現代音楽を中心に」平野貴俊(東京芸術大学大学院)

(2) 「ケベコワの多くは本当にラシストなのか? - 間文化主義の現在を問う」丹羽卓(金城学院大学)

(3) « Révolution tranquille 10 ans après: évolution et transformation au cinéma québécois » PARK Heui-Tae (Université de Korea)

11:45- 昼食 12:00-13:00 総会

13:00-14:15 ②基調講演

« L'étrangeté des rapports entre le Québec et les communautés francophones en milieu minoritaire » 「ケベックとフランコフォンの少数派共同体との奇妙な関係-歴史的観点から」

●講演者：Marcel Martel (Université York)

マルセル・マルテル(ヨーク大学)

●司会・通訳：小松祐子(筑波大学)

14:30-16:30 ③シンポジウム「フランコフォニーとケベック」

●司会・コーディネーター：長谷川秀樹(横浜国立大学)

●コメンテーター：クレール・ドゥロンジエ代表(ケベック州政府在日事務所)：代理 マルク・ベリヴォー広報担当官

(1) 「フランス語圏内でのみに存在感を増すケベック-国際フランス語記者連合(U PF)の視点から見て感じる事」谷口侑(ジャーナリスト)

(2) 「フランス語は本当にビジネスに適しているのか?」瀬藤澄彦(帝京大学)

(3) 「chocolatポッドキャストでフランコフォンをめぐる」ボブ・レナス(redたんぼぼ有限公司プロデューサー)

17:00 閉会式 17:30 懇親会



①自由論題セッション報告

司会 山出裕子（明治大学）

開会式の後に行われた「自由論題セッション」では、3つのそれぞれテーマの異なる興味深い発表があった。

まず最初の発表は、東京芸術大学大学院の平野貴俊会員による「1950－1960年代のラジオ・カナダによる芸術音楽放送－ヨーロッパ現代音楽を中心に」であった。モントリオールの街を歩いていると、どこからともなくクラシック音楽が聞こえてくるのだが、それは「ラジオ・カナダ」などの国営放送が、クラシック音楽を「民主化」させてきた結果であることがわかる、大変興味深い発表であった。

平野会員は、特に「現代音楽」に注目し、ケベックにおける芸術振興のあり方をフランスのそれと比較した。例えば、ケベックにおいては、1950年代からテレビの普及率がフランスのそれよりも高かったため、テレビというメディアを使って、クラシック音楽を普及させることに成功したことなどが紹介された。これらの「ラジオ・カナダ」による、ケベックのクラシック音楽の普及に関する様々な事実は、ケベックの「文化政策」に基づいて行なわれたものであることもまた明らかにされた。つまりそれは、「芸術の民主化」であり、このようなケベックの文化政策と呼応した、「ラジオ・カナダ」による試みは、近年、ケベックで論じられる間文化主義アンテルキョルチュラリスムを作り出す土台にもなっているのであろうと考えさせられる、示唆に富む発表であった。



平野貴俊会員



丹羽 卓会員

続いての発表は、金城学院大学の丹羽卓会員による「ケベコワの多くは本当にラシストなのか？－間文化主義の現在を問う」という、タイトルからも、大変興味深いものであった。特に『モントリオール新聞』の調査結果として、ケベック人の46%が「自分はラシストである」と答えていたとの事実には、少なからずも驚かされた。私自身の経験では、ケベックの人たちは移民や外国人に対して、（人種を）差別することなく接している印象があったためである。しかしながら、丹羽会員の発表では、この調査で「若干ラシスト」と答えた、どちらかというラシストには入らない部類の39%の人々が「ラシスト」とされていることから、「ケベコワの多くがラシスト」という『モントリオール新聞』の見出しに結びついてしまったとの分析が示された。また、同様の調査をフランスで行った場合、これほど多くの人々が、自分自身を「(若干)ラシストであるとは、表現しないだろうとの指摘もあった。このことについて、いくつかの理由が示されたが、そのうちのひとつとして「ケベックのほうがフランスよりもラシストと認めやすい」との可能性が指摘された。丹羽会員によれば、それはケベック社会において他文化の存在が認められていることを意味するものである、とのことであった。こうした他文化の存在を認めやすいという環境のあることもまた、ケベックの間文化主義の一面を説明しているのではないかとの印象を受けた。なお、丹羽会員による本発表と同タイトルの研究論文が、11月22日に出版予定の『小畑精和先生追悼論集「異文化を紡ぐ文学－間文化主義の可能性－』に掲載される。こちらも是非、ご覧いただきたい。



パク・ヒテ氏

最後に、韓国ケベック学会のパク・ヒテ氏による「静かな革命の10年後：ケベック映画における進展と変容」と題する発表があった。ケベックの映像文化の伝統的特徴ともいえる「ダイレクト・シネマ」が、特に「静かな革命」以降の映画製作に大きな影響を与えていることを明らかにする発表であった。7月のAJEQ研究会でも杉原氏によってケベックの「ダイレクト・シネマ」についての詳しい説明があったが、その際にも例として挙げられた*Les Raquetteurs*の一場面が引用された。パク氏によれば、この作品の中で用いられた構図と類似した場面が1971年のクロード・ジュトラ監督による作品『僕のアントワヌおじさん』に挿入されているとのことであった。これは、近年のケベックの文化が多様性や間文化を特徴としている一方で、その下地となっているのがケベックの伝統文化であることを明らかにするものであった。



Les Raquetteurs の映像の一部

今回の自由論題は、それぞれ異なるテーマを扱っていたが、ケベックの伝統的な文化が、近年、ケベックにおける文化の多様性を表現する際に用いられる間文化主義という概念の根底にあることを明らかにするものであった。また、その現状が様々な視点から分析・指摘されたことは、ケベックの間文化主義のさらなる可能性を示唆している、との印象を受けた。

②基調講演報告

司会・通訳：小松祐子（筑波大学）

講演「ケベックとフランコフォンの少数派共同体との奇妙な関係－歴史的観点から－」

«L'étrangeté des rapports entre le Québec et les communautés francophones en milieu minoritaire»

講演者 マルセル・マルテル（ヨーク大学）

Marcel Martel (Université York)

今大会では国際ケベック学会（AIEQ）の助成を得て、カナダからヨーク大学歴史学科マルセル・マルテル教授を招へいし、講演いただいた。マルテル教授の専門は20世紀カナダ史で、主に以下の二つのテーマを研究対象としている。1）1867年以降のフランス系カナダ人アイデンティティの変容や、英語圏カナダに暮らす少数派フランコフォン共同体とケベック社会との制度的関係。1997年の著書*Deuil d'un pays imaginé*（オタワ大学出版、仏系アメリカ歴史研究所ミシェル・ブリュネ賞受賞）では、「静かな革命」により強まったケベック・ナショナリズムが、カナダ全土に広がるフランス系カナダ人の制度的ネットワークの連帯強化に与えた影響について分析を行い、仏系カナダに関する新たな理解を促した。その後も、北米に分散するフランコフォン移民のアイデンティティについて、彼らの文通をコーパスとした研究をなさっている（*Envoyer et recevoir. Lettres et correspondances dans les diasporas francophones*, 2006年）。

2）上記研究を通じ、少数派フランコフォンに対する連邦政府、ケベック州政府の政策に関心を持たれたマルテル教授は、公共政策の決定にかかわる、個人、メディア、ロビー運動家、官僚、政治家、制度の役割や影響について研究を始められた。言語政策についての著書に*Légiférer en matière linguistique*（2008年ケベック州議会賞とケベック州議会議長賞を受賞）、*Langue et Politique au Canada et Québec*（2012年）（いずれもMartin Paquet氏と共著）がある。





講演中のマルテル教授

最新の著書 *Canada the Good? A Short History of Vice Since 1500* (2014年) では、悪（飲酒、売春、ドラッグなど）の規制に関する公共政策を分析している。

今大会では「ケベックとフランコフォンの少数派共同体との奇妙な関係—歴史的観点から—」と題する講演をいただいた。まずイントロ部分でケベック州外の北米フランコフォン少数派共同体とケベック州との関係について、両者に共通する要素、異なる要素を紹介し、講演内容の導入があった後、第1部の「北米フランス語地域の境界の変化」では、17世紀にさかのぼるフランス系の北米大陸への入植からはじめて、少数派フランコフォン共同体が形成された歴史的経緯を説明した。とくに米国ニューイングランド諸州へのフランコフォンの移住についての話が中心であった。

第2部の「社会を築く：制度的ネットワークを支えとして」では、ニューイングランド諸州へ移住したフランコフォンたちが、フランス語系のアイデンティティを保つために制度的ネットワークを整備していった過程が述べられた。カナダ西部へ移住したフランコフォンたちも、同様のネットワークを形成していった。彼らは、当時のカナダ連邦政府や州政府（マニトバ州、サスカチュワン州など）のとり言語文化的「同化」の政策と戦い、教育言語としてのフランス語の使用を要求し、自分たちのメディア（新聞・ラジオ）を創り、カナダ全域、北米大陸全体にまたがる組織を作っていた。

第3部の「共に生きる意志：共通のアイデンティティ想定、東の間の夢…」では、1930年代以降にフランス系カナダに生じた変化が紹介された。とくに1960年代以降はケベックと他のフランコフォン共同体とのあいだに緊張関係が生まれたことを詳しく説明くださった。最後の結論部分では、これらのフランコフォン共同体の今後の展望について、とくに、新しい移民との関係や国際共通語となった英語との関係からのまとめがあった。

今回マルテル教授によりケベックとケベック州外のフランコフォン共同体との関係を扱うご講演をいただいたことは画期的なことであったと思われる。これまで本学会においてケベック研究はさまざまな観点から深化を見せているが、本講演のように外部との関係のなかにケベックを位置付ける本格的研究はなかった。ケベック研究の新しい魅力を発見させてくれるご講演であったと言える。マルテル教授は、終始ゆっくりとした口調で、またパワーポイントの地図やグラフを用いてわかりやすい説明をしてくださった。講演後の質疑応答では、会場から、カナダ連邦の二言語主義により英語州でのフランス語教育が盛んであることについての指摘や、米国へ移住したフランコフォンの経済的成功についての質問などがあった。



（左）フロアーから講演内容にコメントする、ケベック州政府在日事務所のマルク・ベリヴォー広報担当官

③シンポジウム「ケベックとフランコフォニー」報告 司会・コーディネーター：長谷川秀樹（横浜国立大学）

●谷口侑（UPF（国際フランス語記者連合）国際委員会委員）「フランス語圏内でとみに存在感を増すケベック」



谷口 侑会員

ジャーナリストとしての経験をもとにフランコフォニーとケベックがそれに果たす役割について写真や当時の記事等を交えながら講演。UPFは1950年、カナダ出身のフランス語記者ドスタレル・オレーリーが欧州でフランス語を使用する記者たちの懇親をはかるためにフランスのリモージュで結成した親睦組織が発端。現在は五大洲110カ国に3000人を擁しているとのこと。

冒頭では1986年2月、ベルサイユ宮で開催された第1回フランス語圏諸国首脳会議におけるマルルーニー・カナダ連邦政府首相とブラッサ・ケベック州政府首相との駆け引きについて、現地に直接取材されたジャーナリストならではの分析を交えて詳しく紹介。1987年9月、ケベック市で開催された第2回首脳会議、21年後の2008年10月、3度カナダで開かれた第12回首脳会議でのカナダ、ケベックおよび他のフランス語圏諸国（中でもアフリカ諸国）について経験をもとに詳しく語ったほか、2006年、ケベック市に開設された「全アメリカ・フランス語圏センター」の開設や、ルイジアナのケージャン音楽文化復興の第一人者としているザカリー・リシャルとケベックとの関係などにも触れられフランコフォニー国際組織に対するケベックの重要性、さらに南北アメリカのフランス語圏の言語文化にいかにかケベックが多大な影響力を持ってきたか十分に理解できる講演となった。

●瀬藤澄彦（帝京大学教授）「フランス語は本当にビジネスに適していないのか？」

フランス語はビジネス用語としてふさわしくないのか、国際ビジネスは英語だけでよいのかという問題意識に、ご自身の経験（JETROおよびパルクラブ等）を踏まえながら、フランコフォニー（OIF）には、フランコフォニー・ビジネス・フォーラム（FFA）などフランス語圏財界人からなる組織もあることや、グローバルビジネスあるいは金融において実はフランス語のプレゼンスが高まっており、ケベックがその中核を果たしていることを明らかにした。グローバルビジネスは英語だけで十分という意識は日本に相変わらず支配的であるが、むしろこの思い込みは逆に日本の国際的地位を危うくするという警鐘も鳴らした。本講演を聞いて長谷川が想起したのは、アフリカに研究滞在した際、現地住民の多くは、自国のテレビ放送やフランコフォニーの国際衛星放送TV5MONDEに加えて中国のフランス語国際放送チャンネル（CCTV-F）を視聴していたことである。英語しかない日本の国際放送などは誰も視聴しないのである。本講演を聞いて、英語のみを追求することの危険性を改めて感じ、フランコフォニー理解は、この意味でも重要であることも再認識された。



瀬藤澄彦会員



●ボブ・レナス (redたんぽぽ有限会社プロデューサー) 「chocolatポッドキャストでフランコフォンをめぐる」



ボブ・レナス氏

最後の講演は、レナス氏自身の経験を踏まえた、なぜ来日したか、そしてなぜポッドキャストを立ち上げ、運営するに至ったか、そこでフランコフォニー、そしてケベックはどのように関わっているのか、というものであった。日本にはフランス語を学習するための有料サイトや教材は多数あるが、これらはパリが中心であり、パリ以外のものを扱うと余り選ばれない、とのこと。すなわち、日本人のフランス語学習のモチベーションはやはり「花の都パリ」が持つ独特の文化芸術に惹かれて、「パリに旅行したくて」というものであり、これは昔も今も変わらないのだと言う。ベルギー出身のレナス氏は、この状況について疑問を抱き、パリ以外のフランスやフランス以外のフランス語圏の素晴らしさ、多様性という価値観を知って欲しく、ポッドキャスト「ショコラ」を始めたとのこと。ケベックやカナダのフランコフォニーについても度々「ショコラ」の題材となり、単にフランス語を学ぶだけでなく、今まで知られることのなかったフランコフォニーの世界を、画像

を通じて感覚的にも学べる独特なものである。大学でフランス語やフランス文化を教育している私にとっても、語学やフランス文化の教育について考えさせられるテーマであった。

以上のように国際関係、フランス語とビジネス、パリという中心性を見直すという観点から、フランコフォニーとケベックの関係性について三者それぞれの立場から論じられた。「ケベック研究」の中でのフランコフォニーはまだまだカナダや北米、あるいはアンティル諸島という範囲に限られているのかもしれないが、今後のフランコフォニー研究とケベック研究とのインターフェースに期待が持てるシンポであった。

2014年度小畑ケベック研究奨励賞授与式

本大会での総会に続いて、2014年度の小畑ケベック研究奨励賞の授与式が行われました。本年度の受賞者は、荒木隆人会員（京都大学）と、小松祐子会員（筑波大学）の2名で、そのうち小松会員が授与式に出席されました。荒木会員の研究テーマは「間文化主義についての研究調査」で、すでに夏休みにケベックにおいて研究活動を行ったとの報告がありました。小松会員の研究テーマは「ケベックと他の北米フランス語共同体との関係」で、春休みに、ケベックやカナダのフランコフォニーにて研究活動を行う予定とのこと。是非、大きな研究成果を挙げていただき、AJEQ研究会や大会などで、ご報告いただきたいと思います。



シンポジウムの様子



表彰状を読み上げる小倉会長（左）と小松会員（右）

AJEQ会員による新刊紹介

【新刊紹介1】

『吾輩は日本作家である』

ダニー・ラフェリエール著、立花英裕訳

(藤原書店、2014年8月、2,400円+税)



ダニー・ラフェリエールに見られる、小説という^{アート}技

今年の8月末、ダニー・ラフェリエール『吾輩は日本作家である』の翻訳出版によりようやく着けた。なんとか重責を果たし、ほっとしている。小倉和子会長による『甘い漂流』も同時に刊行された。これで、2011年秋から本年2014年夏までに二人で5作品を翻訳したことになる。「速筆を誇る」ダニー・ラフェリエールも、これには「フム」と首を傾げて、感心していた。

『吾輩は日本作家である』は、日本文化、現代社会の異種混濁性、アイデンティティなどがテーマになっているが、作品の内容については「訳者解説」に書いた。新刊書紹介のコーナーではあるが、今回は訳者としてぶつかった翻訳上の問題や彼の文学の特徴について、雑感を交えながら触れさせていただく。

それにしても、この小説にはてこずらされた。たとえば、日本領事館のMonsieur Mishimaなる人物が登場するが、名前をどのように表記するか、はたと困った。原著を読んでいる時には立ち止まらない細部が、翻訳となると、躓きの石になる。そのまま「三島氏」としたら、著者が狙っている効果が出てこない。それに、この小説は「日本」をテーマにしている。それもモンレアルの「日本」なのだ。「日本」を扱った外国作品ほど、日本に紹介するのが難しいものはない。内側から観ている者と、外側から観る者との間には、いつでも微妙な差異があるからだ。

翻訳しながら、日本の読者がどう受けとめるだろうか考えてしまい、私たち日本人がいかに外国人の視線に敏感か、改めて意識せざるをえなかった。Monsieur Mishimaにどんな「訳」を与えたかは、読んでいただければすぐに分かるが、ともかく、このような微妙な細部が随所に隠れているのが、この小説である。

全体の調子をどうするかは、更に輪をかけて悩ましかった。今年の6月、ラフェリエール氏に会った折、翻訳が難しいと言ったら、これはオペレッタだと説明してくれた。「オペレッタか、なるほど」と得心した。たしかに、この小説には音楽劇のような雰囲気がある。それも、プッチーニのエキゾチスムではなくて、オッペンバックの夢幻劇に近い。そして、夢幻劇なるが故に、奇想を含んだ仕掛けが用意されている。野崎欽氏が、本書を「油断ならない」作品と評してくれた(10月29日付「北海道新聞」)が、まさに油断ならない危険な淵が潜んでいる。

誰でも気がつくように、彼の小説は、各章の主要なシーンが必ずしも物語的筋の展開として連続しているわけではなく、むしろ、断続した情景の接合になっている。だから、小説に物語展開のスリルを求める人にはあまり向いていないかもしれない。日本で言えば、永井荷風のような文学に通じる。もっとも、ラフェリエールの小説は、モンレアルを舞台にした作品群と、ハイチを舞台にした作品群に大別されるが、後者は物語性が比較的強い。メデシス賞を受賞した『帰還の謎』は、この双方を総合した作品と言えるだろう。

彼の文章は途中で急に話が変わることがよくある。著者の気まぐれにも見えるのだが、ところがどうしてどうして、そこに想像力の論理が這わされていたりする。ローマン・ヤコブソンは、「詩的機能は等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する」と言ったが、ラフェリエールもヤコブソンの詩学の論理を意識的に、且つそれとなく活用する。ミラン・クンデラが、ある小説の中で、父親がベートーヴェンのピアノ・ソナタの楽譜のある箇所を指差して、これを見ろ、見れば一目瞭然ではないかと言ったと、回想的な述懐をしていたが、ラフェリエールの文章も楽譜のようなもので、読む者が小説内に配された断想を繋ぐ関係を自ら発見するように、無言で誘っている。



ラフェリエールの小説の話者＝主人公は饒舌である。本書でも描写にたえずコメントが付され、アイデンティティや黒人、あるいは日本文学をめぐる考察や意見の陳述が続く。これも大事な構成要素であって、小説のテーマに結びついているが、だが同時に、いま述べた作品の黙示的な布置を攪乱する役割も担っている。ここが、この作家の「油断ならない」ところである。作品の深層構造を煙に巻くように、話者の饒舌が舞っている。

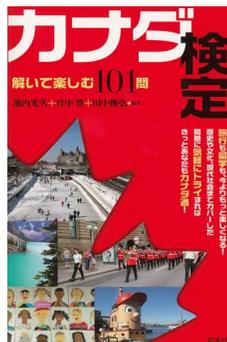
ラフェリエールは趣味の人、粋な人である。一番大事なことを饒舌で圍繞し、ベタに言うような野暮なことはしない。日本的審美観が生れつき備わっていて、だからこそ、芭蕉への愛を、あのよう語る。『吾輩は日本作家である』には、芭蕉的な旅の自由な時間と現代社会の過度に緊張を強いられる時間が隣接している。芭蕉的時間をめぐる考察は、しかし、この作品だけで終わるわけではなく、『何もしないという、ほとんど失われた技』(2011年)に引き継がれる。翻訳しながら、私はダニー・ラフェリエールのしたたかで、油断ならない作家根性に感嘆するしかなかった。(立花英裕)

【新刊紹介2】

『カナダ検定 解いて楽しむ101問』

池内光久、竹中豊、田中俊弘 編著

(彩流社、2014年10月、2,000+税)



21世紀に入ってからカナダやケベックに関する書物の数は非常に増えていて、大きな書店や図書館ではそのためのコーナーも設けられています。入門者としてどれを選ぶか迷ってしまうのが実情でしょう。日本ケベック学会や日本カナダ学会、日本カナダ文学会などでは夫々専門分野の研究者が健筆をふるった労作が多数上梓されていますが、さて一般の人々向けにカナダの全体像を俯瞰する一冊の入門書となると旅行ガイドブックか資料集しかありませんでした。

2011年夏に産声を上げた特定非営利活動法人日本カナダ検定協会[日加検](理事長・田島高志元駐カナダ日本国大使)では既に4回の検定試験を経て数十名の合格者を出していますが、従来使用されてきた指定テキスト『現代カナダを知るための57章』(飯野正子、竹中豊編著 明石書店)は「検定」という目的に100%沿うものではありませんでした。それもそのはず、同書は当初から検定試験用に作成されたのではなく、日加検はそれを取り敢えず借用する形で検定試験を行ってきたからです。本書は四択の設問に続く簡にして要を得た約1000字の解説と写真やイラストや統計に加えて、地図や年表はもちろん、索引、ブックガイド、豆知識を入れ込んだQ&A式のハンドブックとなっています。

本書は昨2013年夏頃から竹中、田中、池内の3名が基本構想を練り、彩流社の担当者若田純子氏の応援により細部に到るまでキメの細かい設計を行い、日本ケベック学会や日本カナダ学会の専門家の特別執筆と加筆訂正を頂きながら出版に漕ぎつけました。とはいうものの本書は、カナダ検定の受験準備のためのテキストとしてだけではなく、ひろくカナダのことを一発で知りたいと願う読者に最適の入門者になっています。カナダ好きが何人か集まってクイズゲームをするにも好適な一冊と云えましょうし、より深化した会話が弾むものと期待されます。

更に本書の特長のひとつは「ケベック」関連の話題が全体の約30%を占めることであり、カナダのなかの“société distincte”であるケベックを側面から知るためにも最適の一冊と申せましょう。(池内光久)

AJEQニュースレターでは、会員の皆様からの、ケベック研究関係の文献を紹介する原稿を、随時、募集しています。新刊、既刊は問いません。とっておきの、ケベック研究に役立つ文献を、会員の皆様にご紹介ください。よろしくお願いたします。

小畑精和先生一周忌 追悼出版物紹介

小倉会長の巻頭言にもありましたように、前AJEQ会長の小畑精和先生が逝去されて、はや、一年近くが経とうとしています。AJEQでは、小畑先生の一週忌（11月22日）にあわせて、二つの追悼出版を予定しています。一足早く、その内容をお知らせいたします。

（1）小畑精和先生追悼論集「異文化を紡ぐ アンテルキョルチュラリスム 文学一間文化主義の可能性ー」

小畑先生がご専門としていらしたケベックの文学や、近年、特に関心を寄せていらした間文化主義をテーマに、日本、ケベック、韓国の研究者から寄せられた8本の研究論文（日本語5本、仏語3本）と作家、ジャック・ゴドブー氏による寄稿、3本の研究ノートを掲載しています。11月22日頃に、皆様のお手元にお届けできる予定です。

（2）AJEQインタビューシリーズ電子書籍版

昨年、ケベック州政府在日事務所の開設40周年を記念して出版されたインタビューシリーズの第2弾として、若手研究者を中心にインタビューを行い、その内容がおさめられた電子書籍が11月22日に発行される予定です。この新インタビューシリーズは、以下のHPからもご覧いただけます。
<http://japon-quebec.org/>

- 本号1ページ目の背景写真
「立教大学（池袋キャンパス）
の本館」（山出裕子撮影）



●編集後記●

この10月で日本ケベック学会は創立7年目を迎え、AJEQ理事会は第4期の新体制がスタートしました。今期の理事会は、関東だけでなく、北海道、東北、中部、関西など、日本各地にご所属のあるメンバーにご参加いただいています。これまでのAJEQの活動は、東京近郊で行われることが多かったのですが、7年目を迎えたAJEQが、さらに発展していくことを視野に、新理事会が構成されました。これからのAJEQの諸活動が、日本の様々な地域で活発に行われていくことが期待されます。AJEQニュースレターでも、そうしたAJEQの研究活動の様子を、できるだけ迅速にかつ、詳細に、皆様にお知らせできるよう努めて参ります。最後に、学期中のお忙しい中、ご寄稿いただきました執筆者の方々に、心よりお礼申し上げます。

（山出）

日本ケベック学会（2014年10月現在）

●主要役員	●広報委員
小倉和子（会長）	宮尾尊弘
立花英裕（副会長）	小松祐子
小松祐子（副会長）	山出裕子
伊達聖伸（副会長）	大石太郎
C・ドゥロンジエ	S・コルベイユ
（顧問・ケベック州 政府在日事務所代表）	

AJEQニュースレター
年3回発行
発行人・小倉和子
編集人・山出裕子

